

「日本は敗けた。山から降りてこい。内地へ帰してやる」

等を知りました。

ついで九月になって山下奉文大将の降伏宣言をラジオで聞いて投降することとなりました。海岸線の「ブツァン」「ガマヤン」を経てレイテ收容所にはいりました。

翌年二十一年十二月五日、レイテ島を離れ帰還の途につき、同年十二月十八日名古屋港に上陸復員となりました。

南方戦線ハルマヘラ苦闘記

茨城県 飯塚 静 男

(軍歴)

昭和十六年徴集、第一補充兵。

昭和十六年と昭和十八年の二度にわたり補充兵の教育のため、三日程度の教育訓練を受けた。

昭和十八年七月二十五日に臨時召集で水戸連隊に入

隊、十八年八月十一日水戸を出発、釜山、山海関を経由、南京より船で揚子江を遡江、八月末に漢口、さらに九月二日、中支湖北省孝感県で中支派遣第五二野戦道路隊(中支軍直轄)に転属することとなった。

この隊は二個大隊編成で、一個中隊三個小隊、一個小隊四個分隊、一個分隊十人の編成であった。

九月三日より十月二十五日まで第一期教育がおこなわれた。この間に古年次兵は常德参戦に参加した。

この孝感付近は気温が温暖で米の二期作が可能な地帯であったが飲料水が悪く、アミバー赤痢が多発した。アミバー赤痢は特效薬がなく、生水を絶対飲まないこと以外に予防の手段がなかった。

私たちは十月二十五日、第一期教育終了と共に常德作戦に参加、第三十二師団に配属されました。

常德への進路は道らしい道とてなく、歩兵はどんどん進撃するが砲、戦車、輜重車両等の進撃ができない。河という河に橋がないために私ども工兵隊は車両を通過させる橋梁づくり明けける毎日でした。

敵弾のなかの橋梁作業中、古年次兵が真っ裸で眉間に

貫通銃創を受け戦死するという悲惨な場面もありました。

私たち道路隊は、徴発した苦力を兵一人で五十人ぐらいを監督して作業を進めるのが任務であった。苦力は僅少な軍票（儲備券）を支払われているだけであるから、油断すると逃亡が相つぐありさまで、これを監督するのが大変な仕事であった。

常徳作戦は常徳を占領後、これを確保、維持するだけの兵力がないので、占領と同時に反転に移ったわけだが、この反転に新四軍が追尾して攻撃を繰り返すので、多大の犠牲を払っての反転となった。

— 南方転出 —

十八年十二月二十九日、第十一軍（中支）より第二軍（豫北派遣軍）に転出の命令がくだった。ために漢口よりの乗船が十九年の正月元日であった。部隊は資材の補給のため上海を経由、広島宇品へとむかい、検疫のため似島検疫所で爪の先まで完全な消毒を受け、海江田市のホテルに宿泊することとなった。

上海呉淞において南方むけ夏服の支給を受けていたの

で、正月の広島の寒さはこたえた。故郷へ手紙をだし、下着類を送ってもらって、やっと寒さにたえた。

その間、宮島へ参拝したり、密集訓練や、南方作戦訓練等で日を送り、また、その間宿舎も二、三回変更した。広島滞在中は内地の食糧事情は悪化して十分な食事をとることができないため、柿の加工したものなどで飢えをしのいだ。

広島で幹部候補生を志願せよとすすめられたが、私は昭和十八年四月に結婚した関係で、軍隊にながいは無用と考えて志願しませんでした。二月一日一等兵に進級。四月十五日まで広島に滞在したが外泊はなかった。

その間、父母が茨城から面会にきてくれました。私の家は農家であったので食糧事情にはめぐまれ、父母がぼたもちをつくってきてくれたが、当時茨城から広島まで二十四時間の汽車旅ですので、少し酸味がでていましたが、むさぼって食べました。私は入隊前は五十キロしかなかった体重が、こうした食糧事情のなかながら六十五キロにもなっていて父母もビックリしていました。

— 南方へ出発 —

四月一日広島をたつて、門司にて船団を組んで、いよいよ南方にむかって出発することとなりました。船団は一万トン級商船六隻と海軍の駆潜艇一隻で組まれたものでした。

黄海は敵潜水艦をさけ、大陸沿岸にそって南下をつづけ、無事、高雄に着き、高雄で生鮮野菜、水の補給を受けました。

高雄を出発後、魔のバシー海峡にはいる。バシー海峡は海が荒れて、波と波の間が二百メートルもあり、海軍の小さい駆潜艇はたえず波間に沈んで、ときどき姿をみせる程度でした。

この海峡で船団の半分の三隻は撃沈され、三隻が残ったのみでした。一隻三千人のうち、五人が救助された船もあり、悲惨のきわみのバシー海峡でした。船内はせまくて一坪に十人もつめこんで、一日にコップ一杯の水が二日支給されるだけです。

船上の監視兵が幾組も立哨して海上を監視し、潜水艦の魚雷の航跡を発見すると、船は蛇行して魚雷をさけた針路にかえ、ふたたび蛇行を繰り返すわけです。

こうした時に私たち、夜は乾パンと饅頭を腰につけ、甲板でいつでも退避できる準備をして休んでいました。こうして三隻だけがマニラへ到着しました。マニラで三か月分の弾薬、糧秣を積んでニューギニヤのマノクワリへと出航しました。

マニラでは暁部隊（船舶工兵隊）の顔見知りの連中にあいました。この時点ではすでにニューギニヤには敵が上陸していて、五月十五日、急遽目的地を変更して、ハルマラ島へ上陸しました。濠北派遣第一根拠地司令部（長は少佐）の指揮下にはいりました。

二十年五月、独立混成第一二八旅団（快捷兵団）の独立歩兵第七八大隊に編入され、工兵隊から歩兵部隊にかわったわけです。

ハルマヘラ島は四国ぐらいの大きさの島で、食糧は三か月分しか積んでいませんので、八月中旬ごろにはなくなり、いらい現地自活で食いつなぐほかすべのない部隊となりました。

まもなくハルマヘラ島の湾内近くにあったモロタイ島に敵が上陸し、この島にあった飛行場を占領して飛行機

が発着するようになりました。ハルマヘラ島はこうした敵の制空圏内にはいってしまつたわけです。

島内には椰子の木がたくさんあって助かりました。私たちの現地自活は、野鍛冶でいろいろな生活用品をつくりました。蕃刀や鍋等を作りました。

現地の人々はほとんど裸の生活で、とくに女の人は衣料品をほしがりました。軍隊の敷布等を食糧と交換しました。

自動車は揚陸しましたが使用する道がなく、エンジンをはずし製材所をつくり、人夫を集めてラワン材等をひきました。

十九年八月頃敵の不発弾や海の爆雷等を利用して、敵の上陸にそなえて地雷をつくり、これを予想上陸地点にふせつしました。この作業で地雷にふれて爆死する事故も発生しました。

食糧の自活が毎日の仕事となりました。開墾のほか、奥地へはいってパバイヤの実、タピオカ、ごぼうのような草を採取したり、海岸えでドラム缶で海水をたいて製塩もしました。

甘薯づくりは、兵隊一人あたり三反歩を目標としてつづけられました。熱帯だから芋の蔓だけがどんどん伸びて芋が出来ない。毎日蔓の芽をかいて、抑制栽培をしないと葉ばかりとなる。ほかの南瓜、タピオカもうえました。バナナも栽培し、バナナの実の取つたのち、熟さないとしぶくて食べられないので、実を土中にうめて、そのうえで三日ぐらいたき火をつづけ、しぶを取る方法を考案したりしました。

夜間敵機の飛来しないまに密林を伐採し、乾燥させて、火でやいて畑をつくる作業がつづけられました。土壌が珊瑚礁で出来ているので表土が浅く、ために芋つくりは二回だけで、あとは肥料の補給がないので収穫出来ない。悪循環の繰返しである。ワナをかけて猪をとったり、蛙の大きなの、大トカゲを取って食べました。あるとき錦蛇の長さ四、五メートル直径二十センチもある大きなをとつたこともあります。小銃弾を二十五発も打ちこんでも死なないので、蕃刀で三十センチぐらいにすぎたに切りきざんでも、まだ体がピクピク動いていました。皮下脂肪が多く、油を取りました。トカゲは非常

にうまくて、あたかも鳥の肉と豚の肉の中間のような味でした。鼠もとったが、くさくて食べることが出来ませんでした。甘薯の葉と、芋、タピオカを中心にありとあらゆる物を物色して食べて、栄養失調をふせぐのに明けくれる毎日でした。

二十年七月に私は結核菌による肋骨カリエスをわずらいました。第一野戦病院に入院し産婦人科出身の軍医殿に手術を受けました。手術後大発艇でスパイヌの兵站病院に護送され、千葉医大出身の畑軍医大尉の執刀で切開手術を受けました。この手術も全身麻酔でなく、局部麻酔でおこなわれました。病院も芋粥で三、四か月で治癒しました。

終戦は八月十五日より二十日もまえに濠洲放送を傍受して予想していましたので、敗戦の動揺は少なかつたと思います。終戦後はパラシュートの布を染色し、色々な衣装をつくり、それで慰問団をつくり、主として芝居を中心に部隊ごとに慰問団の交換等をなぐさめあって暮らしました。

終戦と同時にインドネシアの義勇兵、台湾兵、朝鮮兵

等第三国兵をさきに復帰するように手配されました。

終戦後も、食糧事情は少しもよくなりませんでした。甘薯とタピオカで餓をしのいで暮らしました。オランダ軍は日本兵を使役にはいっさい使用しませんでした。その点私どもは助かりました。土民が漁業にはほとんど関心がなく、海にも河にも魚類が豊富で、とくに小鰻や川魚はたくさん取れました。

終戦後、地雷や海の爆雷の除去作業が大変でした。この作業中爆死した兵も出ました。

終戦前には敵の不発弾等で火薬を抜いて手榴弾等兵器もつくりました。

二十一年六月一日、苦勞に終始したハルマヘラ島を出発。六月十日夢にみた故国和歌山県田辺港に上陸。私は上陸後京都の国立病院に入院治療を命ぜられていました。が、上陸後脱走して帰郷しました。

帰郷後、当分マラリヤの発熱がつづきましたが、水戸や土浦の病院からキニーネをわけてもらって治療し、そのうちに全快しました。